

海に沈む夕日の光を受けて、様々な形に切り分けられた無数の小さな水田が、一様に黄金色に輝いていた。

「わあ、素敵なた焼け！ 上から見る柵田も、やっぱりきれいですね！」

俺の傍らで、三島彩子（あやこ）がはしゃいだ声を出している。

「今日は偶々いないみたいだけど、県外からもけっこう観光客が来るような名所だからな、ここは」

佐賀県東松浦郡玄海町、浜野浦の柵田。その展望台に今、俺たちふたりはいる。

金色のベルが吊るされたハート形のモニュメントが立っており、金色のプレートには「恋人の聖地」と毛筆の書体で記されていた。

こんな最高のビュースポットで、うら若き高校生の男女が並んで夕陽を眺めているのだ。これはもう、どこからどう見ても正式にお付き合いしているカップルの姿にほかならない。

もし仮に、付き合ってもいないのに俺が勘違いをしていたのだとしたら、恥ずかしさのあまり柵田にダイブしていたと思う。

でもご心配なく、俺たちはちゃんと付き合っている。三日前から。

三島の告白を俺がOKして、晴れて付き合い始めた出来立てホヤホヤのカップルなのだ。

俺は今、三島と一緒にいるだけでテンションが上がってしまう。生まれて初めて彼女ができたのだ。どうかご容赦いただきたい。

ただ、彼女に浮かれた様子を見せたくなくて、あえてそっけない口調で、俺は尋ねた。

「——で、さつき言ってた、話ってた？」

「あ、はい……」

さきほどまでの笑顔をひっこめ、三島がうつむく。そして、しばらく足元を見てモジモジしていたかと思うと、今度はまっすぐに俺を見た。夕陽を映すその大きな瞳に、決意の色が浮かんでいる。

これは、早くも恋人たちの次なるステップを求められるのかと、俺はにわか緊張した。

「青木さん——！」

「はい！」

「私と——！」

「うん！」

「——別れてください！」

「——え？」

これはあれだ、棚田にダイブする準備を……。

三日前のホームルームでのこと。ゴールデンウィーク明けでだらけきっていた俺たちの前に、クラス担任が見知らぬ少女を連れて現れた。

「三島彩子です。父の気まぐれで、東京からこの玄海町に引っ越してきました。どうぞよろしくお願いします」

そこは普通、「父の仕事の関係で」と言うところではないだろうか。

教壇の前に立つ時期外れの転校生を、クラスメイトたちが物珍しそうな顔で注目している。対して、注目的になっっている当の本人は、照れたり臆したりという素振りは一切見せず、静かな微笑みを浮かべて俺たちのことを眺めまわしていた。

「ちよっと変わった奴だな——可愛いけど」。それが俺の、彼女に対する第一印象だった。

その日の放課後。俺はひとり教室にいた。

休み前に出されていたレポート課題の存在をすっかり忘却していた俺は、教師から居残りを命じられ、なんとか「それらしきもの」をでっち上げて、ようやく帰路につこうとしているところだった。

不意に教室の前のドアが開いて、三島彩子が顔を覗かせた。

「——あれ？ 皆さんもう帰っちゃったんですか？」

「……そりや放課後だからな。三島……さんは、こんな時間まで何してたんだ？」

「先生に職員室に呼ばれて、今後の授業のこととか、あれこれレクチャーを受けてました。青木さんは、なにか用事があったんですか？」

名前を憶えられていることに対する驚きが顔に出ているのだろう。三島は俺を見て、口元を両手で隠しながらクスクス笑った。

「青木翔太さん、覚えてますよ名前。朝のホームルームで、皆さんが自己紹介してくれた時、青木さんだけ私の方まったく見ないで、ぶすっとした顔で名前だけ言って座っちゃうんですもん。……ひよっとして、女の子と話すの、苦手なんですか？」

苦手であることは確かだが、他人から改めて言われると、男子高校生の繊細なハートはたいそう傷つくものだ。ほっとしてくれ。

ふれくされる俺を見て、三島はさらに可笑しそうに笑って、それから言った。

「ねえ青木さん。よければお姉さんが、女の子と話す練習台になってあげますよ？」

俺たちは同じ年だろ。——いや、それより今なんて？

「私、引っ越してきたばかりで、この町のこと全然知らないんです。今から案内しても

「ええませんか？」

意外な申し出に、俺の頭はしばらくフリーズしていた。

玄海町は九州の北西部、佐賀県の東松浦半島西岸に位置する町だ。

町の西側に広がるのは雄大な玄界灘。この玄界灘の別名が「玄海」で、町の名前はこれに由来している。

人口は五千人とちよつと。ブランド牛肉である『佐賀牛』が特産品のひとつで、飼育に力を入れていることから「町の人口よりも牛の数の方が多い」なんて言われたりもする。

「自然が多くて、とっても素敵なところですね」

「でも、東京と違って一〇〇メートルおきにコンビニが並んでるようなところじゃないぞ」

ぶつきらぼうに言うと、三島は「当たり前じゃないですか」と可笑しそうに笑った。よく笑う奴だ。

俺たちは学校を出ると、そのまま自転車で町を回ることにした。俺が先頭になって、ゆつくりとペダルをこぐ。

飯屋湾を左に見ながら、有浦川を渡って少し進み、左手に折れて小さな橋を渡ると、三島公園に入る。

「なんだか、名前に親近感を覚えます」

三島公園は、三島という二つの小さな島に作られた自然公園で、散策にもちょうどいい。

三島神社という古くからの神社があつて、俺たちはそこで一度自転車を止めた。

「この三島神社では、秋に大きな祭があるんだ。二台の御輿を船に乗せて、大漁旗を掲げた船で伴走しながら、湾内を回るんだ。あと、地元の小学生の女の子たちが、巫女さんの格好して『浦安の舞い』って踊りを、神様に奉納したりするぞ」

「素敵ですね。お祭、ぜひ参加してみたいです！ ……ダメだなあ青木さん、そこは『じやあそのときは一緒に行かないか？』って、さりげなく女の子を誘うところですよ？」  
恋愛初心者にも、そんな上級テクニクを紹介されても困るんだが。

公園を一回りして、さて次は、と思つてみると、後ろを歩いていた三島が、肩で息をして立ち止まっていた。

もうへこたれたのか？ まったく、東京の人間は体力がないな。

俺は自販機でジュースを二本買ってくと、ひとつを三島に手渡しやる。

「……ありがとうございます。このさりげなさはポイント高いです。お姉さん、喜んでやますよ？」

「——お褒めにあずかり光栄だ」

公園の柵に背を預けながら、振り返って海を眺める。

仮屋湾をはさんで、対岸が霞んで見えた。

「——でも、本当に綺麗な景色。私が以前住んでいたところには、近くに海なんてなかったから、なんだかとても贅沢な感じがします」

「——そういえば、この玄海町の仮屋地区と、対岸の肥前町菖津（しょうづ）地区の海岸には、丸い石が多いんだそうだ」

「へえ、どうしてなんですか？」

「昔々、船に乗れない仮屋の鬼と菖津の鬼が、海岸の石を投げ合って喧嘩したんだそう。お互いに投げられたら投げ返すもんだから、切りがない。そうしているうちに、いつしか投げ続けた石が丸くなったんだってさ」

「投げ合って喧嘩、ですか……」

三島の顔が曇っていた。俺はなぜかいたたまれなくなつて、気づけば口を開いていた。

「——もともと、二匹の鬼は恋人同士だったんだ。でも、悪行が過ぎて、旅の坊さんにそれぞれの海岸に封じられてしまった。はじめのうちは『お前が悪い』『お前がドジを踏んだせいだ』と大声で罵り合いながら、石を投げて喧嘩をしていたんだが、そのうちに、相手が恋しくなつてきて、なんとかして謝りたいと思うようになったんだ」

三島が俺を見ている。俺は海を見ている。

「——で、二匹は投げる石に、こっそり言葉を吹き込んだんだ。『ごめん』とか『会いたい』とか。他の人に聞かれると恥ずかしいような、そんな言葉を石に託して、それで互いに投げ合っていた。そのうち、長い時間が過ぎて、はじめは角ばつてゴツゴツしていた石は、込められた言葉と同じ、丸くてツルツルしたものばかりになったんだそうだ。めでたしめでたし」

「——よかった。そんなお話だったんですね」

「まあ、俺の思い付きだけど」

「え——？」

「さ、そろそろ行くぞ」

俺はさっさと自転車に乗り込んだ。

俺は道々、「石田三成の宝伝説」や「値賀崎の鯛女房」の話、狸が人を化かした「女石の話」など、玄海町に残る伝説や昔話を話して聞かせた。

気のきいた話題を思い付かなかったからだが、三島は興味深そう聞いてくれた。こちらとしても話がいがあるというものだ。

「青木さんって、地元のお話とかよく知ってますね。そういうの、好きなんですか？」

「俺んち親父が町役場勤めだし、じいちゃんばあちゃんもそういうのよくしてくれたから、自然と覚えてるだけだよ」

「でも、本当に色々な物語が残っているんですね、玄海町って。これからここに住めるなんて、素敵です」

三島の言葉に、自分が褒められたわけでもないのに、なぜだか少し、嬉しくなった。

幸いだったのは、季節が夏に向かうこの時期、日没まで時間があつたことだ。空はまだ明るい。

なので、俺は三島を浜野浦の柵田に案内することにした。

高台に立つと、海から吹きつける風が汗ばんだ身体に気持ちがいい。

「ここが有名な柵田ですね。綺麗……。田植えされたいろんな形の水田が、空の色を映して鏡みたいですね」

喜ぶ三島の横顔を見ながら、俺はさっきの彼女の言葉を思い出していた。

『これからここに住めるなんて』

「——なあ、ちよつと下に降りないか？」

「下——？」

俺たちは柵田の横の道に沿って、入り江の近くまで降りてきた。柵田を見上げる格好になる。

「ほら、ここからだ柵田の側面の石垣がよく見えるだろ？」

「本当だ。こういう風になっていたんですね」

「この石垣は、すべて手積みなんだってさ。玄海町の北に、豊臣秀吉が朝鮮に出兵した時の拠点になった、名護屋城っていう城があるんだが、その築城のときに活躍した石工の子孫たちがここに住み着いて、この柵田を築いた——とも言われているんだそうだ」

「ということは、四〇〇年くらい前から、ずっと続いているってことですね」

「柵田ってさ、上の方から水をためていって、どんどん下の田んぼへと水を送っていくらしいんだけど、途中でどこかひとつの田んぼがやめてしまうと、水がそこで止まってしまふんだってさ。だから、田んぼを作る人どうしの、協力が大切なんだって聞いた。作付面積が狭かったり、形もまっすぐではないから、なかなか機械も入らない。入らないところはすべて手作業でとにかく大変なんだって。それでも、そんなものが何百年も続いていくことなんだよな」

そんなものが俺の生まれた町にあることに、なんというか、誇らしさを覚える。俺の手柄でもなんでもないのだけれど。

「——青木さん、どうして私をここに？」

「……三島もこれからこの町に住むわけで……地元の先輩として自慢してきたかったんだ」

そう、きつとそれだけだ。

三島が改めて柵田を見上げる。

「——こうして見ると背後の山というか、空に向かって伸びる階段みたいに見えますね」

「空に伸びる——階段？」

俺もつられて顔を上げる。言われてみればそう見えなくも——いや、そうか？

「青木さんのおかげで、私も柵田の素敵なお見方、発見しちゃいました。——ね、先輩？」  
三島の微笑んだ顔を、夕日が紅く染め始めていた。

「今日は、どうもありがとうございました」

「——どういたしまして」

俺たちは有浦川のところまで戻ってきていた。彼女の家はここは上流の、町役場の近くだそうだ。

俺は慣れない女子との交流にどっと疲れたが、それは心地よい疲労感だった。

「じゃあ明日また学校で、と告げて自転車をこぎ出そうとした俺を、三島が呼び止めた。案内してくれたお返しが要りますね。なにがいいでしょう？」

別に、改まってお返しをされるほどのことなんてしていないのだが……。俺がそう言うおうとしていると、彼女が先に口を開いた。

「……そうですね。女子の苦手な青木さんに、今後も継続的に女子とふれあう機会をプレゼント、というのは……その、どうでしょうか……？」

「——なんだそれ？」

「えーと、つまりですね……。お姉さんと、その、つきあって……みませんか？」  
俺はその日、何度目かのフリーズを起こしたのだった。

「——さん、青木さん！ もしもーし」

はっ！ ショックで短い走馬灯を見ていたようだ。

「あ、ああ……。やつぱり俺じゃ役不足だっつてそういう話だよ……。ごめん、三日間だけだったけど、その……楽しかったよ……」

ダメージが脚に来ていてすぐさま地面に倒れ込みたい気分だったが、なんとか踏ん張って少しでも格好をつける。つけられてるか？

「ごめんなさい、勝手ばかり言っつて……。でも少しだけ、私の話を聞いてもらえませんか？」

正直、すぐさま帰つてふて寝を決め込みたかったのだが、ここまで来たら毒食らわば皿まで、という心境になり、俺は力なくうなづいた。

「私、小さい頃から肺の病気でして」

「——肺？」

「ええ。『肺気胸』って言って、肺に穴が開いちやう病気です。これまでも何度か入院

して……。実は去年もそれで丸一年、学校に行けなくて。進級もできなかったんです」

三島がたまに自分のことを「お姉さん」と呼んでいたが、ふざけていたわけじゃなくて、実際年上だったってことか。

「退院後も学校に行くのがつらくなってしまっ……。そしたら、お父さんが急に言い出したんです」

『母さん、彩子。母さんの実家がある玄海町に引っ越さないか！ 父さん、昔から海の近くの土地に住んでみたいって思ってたんだ！』

「——そりゃ、唐突だな」

「気まぐれに聞こえるでしょ？ でもきつと、私が落ち込んでいたから、そう言ってくれたんです。昔からなんですよ。私やお母さんが大変な時に、決まって突拍子もないことを言い出すんです」

——カツコイイ男だな。俺は会ったこともない三島の父親に、軽い憧憬の念を抱いた。「だから、この町に引っ越してきてからは、気持ちを切り替えて頑張ろうと思って。正直、肺の不安はあるけど、でも、明るくいようって。お父さんとお母さんに心配かけないように。友達もいっぱい作って、あとついでに——彼氏なんかも、その、作っちゃったりして……」

「それでたまたま、練習台として俺に白羽の矢が立ったのか——」

「……ごめんなさい。でも、誰でもよかったわけじゃないんですよ？ ——青木さんが、お父さんと同じことしてくれたから」

「——同じこと？」

「鬼と、丸い石のお話です」

ああ、あの作り話か。

「私、この病気が原因で、小さいころ、仲の良かった友達と喧嘩になったことがあったんです。ふたりに遊ぶ約束をしていたのに、その日たまたま肺が苦しくなって。それで、約束を破った私に、その友達が怒ってぬいぐるみを投げつけてきて——」

「でも病気じゃ仕方ないじゃないか」

「——ええ。でも幼い私はショックだったんでしょね、今でもたまに夢に見るんです。あの昔話を聞いた時も、自分では気が付かなかったけど、それが顔に出ていたのかもしれないですね。——そしたら、青木さんが優しいお話を作ってくれたんです」

「あんなの——たまたま思いついた話をしただけだ」

「ふふ、それでも嬉しかったんです。それに、この棚田を下から眺めて話したときも。私がこれからこの町に住むことを青木さんに認めてもらえたみたいで、嬉しかったんです。それで、青木さんなら——って、思い切って告白してみたんですよ」

なんだか過大評価されているみたいで、尻の座りが悪い。

「でも考えてみたら、会ったその日に告白なんて、唐突過ぎますよね。青木さんの気持ち、まったく考えていませんでした。それと——だから私、青木さんに私をちゃんと好きになってもらってから、それから付き合いたいな、と思ってしまったんです。だから、いったん別れてほしいって、お願いしちゃいました。お騒がせして、すみませんでした」  
「はあ、とため息をついて俺は天を仰いだ。夕焼け空の真ん中を、鳥の群れが横切っていく。」

——まったく俺は、なんて厄介な女子を好きに……ん？

「——青木さん？ どうしたんですか？」

海風が、三島彩子の柔らかな髪をふわりとかきあげた。

その光景を見ながら、三島の願いが叶うのはそう遠くないみたいだ、と俺は胸の中でつぶやいた。

<完>